穂波東校中学部ＨＰ通信

令和元年度第０５号
文責：穂波東校　中学部校長　山本

※ 本通信は、毎月プリントにて発行している通信を基に作られています。
※ 個人情報等に関する内容は、削除されています。

１　穂波東校中学部の特色ある教育活動（その２）

前回の「穂波東校中学部通信（第４号）」において、本校職員の努力と創意工夫により、多種多様な「特色ある教育活動」が企画・実施されていることをお伝えしました。

年間を通して、多種多様な体験や出会いを通した学習活動が企画・実施されていることは、この穂波東校中学部の特色であり、良さの一つであると言えます。

今回、そのような学習活動の一つである、「９年生職場体験学習」が新聞記事となりましたのでご紹介します。この新聞記事を通して、改めて本校の「特色ある教育活動」の価値を知ることができました。

駅内放送にも挑戦

穂波東中３年生が職場体験

ＪＲ飯塚駅で駅内放送をする穂波東中３年の光野颯太さん（中央）と木稲将希さん（左）

飯塚市平恒の穂波東中（山本健志校長）の３年生89人が、２日から４日にかけ飯塚市などの36事業所で、進路意識を高めるための職場体験学習をした。

同市菰田西のＪＲ飯塚駅では、木稲将希さんと光野颯太さんがホームや改札の清掃、駅利用者へのあいさつを行った。２人は駅務室で駅員の帽子をかぶり、列車が到着するたびに「ご乗車ありがとうございました。飯塚、飯塚駅です」と駅内放送にも挑戦し、流ちょうにこなしていた。

一方で、駅利用者から列車ダイヤの質問を受けた際には対応に苦労していた。

同駅は職場体験を毎年受け入れている。駅員の江﨑雄哉さん(20)は「今年の生徒は初日から2日間、機敏で動きが良く、完璧でした」と驚いていた。2人は「将来の夢を見つけるために駅を選んだ」「お客さんから話し掛けてもらえてうれしかった」と話した。

同校の職場体験学習は飯塚、嘉麻両市と桂川町で毎年、実施。体験はそれぞれが新聞形式でまとめ、発表会も開く。1、2年時には福岡市などの会社を見学したり、ＶＴＲを見たりして職業理解を深めてきた。担当教師によると、体験学習後の生徒は進路のことを考えるようになり、就きたい仕事に対する関心が高まるという。

（西日本新聞社筑豊総局で職場体験学習をした穂波東中3年の大井真翔（まさと）さん、久保山兼多さんが取材、執筆、写真撮影を担当しました）

令和元年七月六日
西日本新聞

かわすじ今日談

中学3年生記者の奮闘記

筑豊総局長
高木　昭彦

「新聞？　手に取ったことはあります」。ほうほう、何と感心な中学生ではないか、と思ったのもつかの間。「家族に『新聞受けから朝刊を取ってきて』と頼まれたときに手に取りました。実際に読んだことは…一度もないかな」。まあ、そんなものか。今どきの中学生が新聞を読むことはまれだろう。

悲観的すぎると思う方もいるだろうが、電子メディア大盛況のご時世にあって紙メディアの苦境は極めて深刻だ。中学生2人ともスポーツやゲームなど関心があるニュースは、中学に入って買ってもらったスマートフォンを使いインターネットでチェックしているそうだ。

飯塚市の穂波東中学校から職場体験学習の3年生2人を受け入れるよう依頼され、職場に余裕がなくて正直迷ったが、迎え入れた。というのも、これまでも学校で新聞や記者の仕事について話す中で、自分の仕事を見つめ直す機会となり、まさに「教えたつもりが教えられ」の経験があったからだ。

×　×

2人は3年生の大井真翔（まさと）さんと久保山兼多（けんた）さん。将来の夢はIT業界で働くことだそうで、残念ながら職場体験先として新聞社が第1希望ではなかった。しかし、2人は「コミュニケーションが苦手なので記者の取材に興味がある」「新聞作りの中でITがどう使われているのか知りたかった」と、気遣ってくれるではないか。がぜん勇気づけられ、新聞や記者の仕事について一気に話した。

ニュースの八つの基準（新奇性、人間性、社会性、国際性、記録性、普遍性、影響性、地域性）や、新聞記事の構成要素の5W1H（どこで、誰が、何を、なぜ、どのように）などなど。すると2人は昼食後のせいか、話が退屈なせいかあくびを連発した。慌てて次の日の取材体験の準備に移った。

自分たちが取り組んでいる職場体験そのものを取材してみないかと提案すると、「楽しそう」。表情が生き返った。「座学より実践」派の2人なのだ。受け入れ事業者のリストから取材をしたい所を選ばせると、「写真映えするところはどこかな」「制服とか着ているといいよね」などと話し合い、JR飯塚駅に決定。2人が準備した質問内容もいい線を行っている。

×　×

さて本番の取材。まずは穂波東中に出向き、先生から職場体験の狙いなど質問した。やはり相手が先生なので、やりとりはいささか押され気味で、逆質問に慌てる。「理解していないことを分かったふりをして済ませてはダメ」と、あらかじめ記者の心構えを念押ししていたからか、やり通してくれた。

飯塚駅では、友人2人の姿を見てリラックスできたようで、アドリブの質問が次々と飛びだした。写真撮影はアングルが決まらず何度も挑戦し、納得の1枚をゲット。時にはメモ替わりにスマホで撮影したり、取材した駅員さんの名前を間違えないように本人に書いてもらったりと、仕事の工夫も随所に見られた。ただ、原稿執筆には苦労し、ほとんどぶっ通しで4時間格闘した。2人でやり抜き、机の上には消しゴムの消しカスが小さな山になっていた。

「取材は恥ずかしくてできないと思っていたけど、不思議とどんどん話せた」（大井さん）、「記者は硬い取材ばかりしているイメージだったが、フレンドリーな取材もあると感じ、職業としてプラスのイメージになった」（久保山さん）。2人は初めての場所に入り、初めての人に知らないことを聞く楽しさをそろって口にした。

仕事に追い立てられる中、記者の素朴で根源的な喜びをあらためて思う。2人の感想を聞きながら、私は笑顔でうんうんとうなずいていた。

2019.7.8

令和元年７月８日　西日本新聞

編集後記

七月八日朝、本紙で紹介した「かわすじ今日談」の筆者である高木筑豊総局長様より一本の電話が入りました。内容は「直接お会いして、お詫びをしたい。」とのこと。実はこの記事の棒線部分は「嘉穂東中」と誤って書かれていました。（本紙で紹介している分は、私の方で修正しています。）私は「お電話で十分です。ご丁寧にありがとうございます。」と遠慮しましたが、熱意を持って言われるのでお受けすることにしました。

すぐに高木様は来校され、次のような内容のお話をされました。「職場体験の一日目、私は受け入れた生徒さんたちに記事を書く際に正確に書くことが大切であることを話しました。その中で名前など固有名詞においては、誤字や誤りは許されないことを伝えました。その私が今回このようなミスをしてしましました。生徒さんたちにも大変申し訳なく思っています。」と。私は「そこまで真剣に、責任をもって生徒たちを受け入れ、指導して下さっていたのか。」と思い、胸が熱くなりました。そして、「今の局長様の言葉を生徒たちに伝えさせて下さい。」とお願いしました。

今、文部科学省は「社会に開かれた教育課程」というキーワードの下、子どもたちが社会や世界に向き合い関わり合いながら、自らの人生を切り拓いていくために必要な力を育てていく教育の重要性を打ち出しています。今回の職場体験学習でその理想の姿の一つを見せられた思いがしました。

２　嘉麻・嘉穂・飯塚地区総合体育大会（嘉総大会）

本年度も穂波東校中学部の部活動生たちは、中体連の嘉総大会において、これまでの練習の成果を精一杯発揮し、素晴らしい試合・競技を展開しました。

男子バスケットボール部 優勝 筑豊大会進出	男子卓球部 団体戦：3位 筑豊大会進出	女子卓球部 団体戦：準優勝 筑豊大会進出
女子バスケットボール部 予選リーグ敗退	水泳部 女子総合：優勝 筑豊大会進出	水泳部 男子総合：準優勝 筑豊大会進出
女子バレーボール部 予選リーグ敗退	剣道部 団体戦：7位 筑豊大会進出	野球部 3位 筑豊大会進出

どの部も試合では、よく粘り、よく攻め、気持ちでは負けていないプレーを見せてくれました。そのような穂波東の部活生の姿を学校長として誇りに思いました。